

身体拘束などの虐待を生まない組織風土づくりをめざして

内閣府 障害者政策委員会委員長代理
全国身体障害者施設協議会
制度・予算対策委員長 三浦 貴子
(熊本県・愛隣館)

1. はじめに

☆障害者権利条約の一般原則

- (a) 固有の尊厳、個人の自律（自ら選択する自由を含む。）及び人の自立に対する尊重
- (b) 非差別〔無差別〕
- (c) 社会への完全かつ効果的な参加及びインクルージョン《社会が受け入れること》
- (d) 差異の尊重、並びに人間の多様性の一環及び人類の一員としての障害のある人の受容
- (e) 機会の平等〔均等〕
- (f) アクセシビリティ《近づけること, 利用しやすいこと》
- (g) 男女の平等

条約第14条 身体的自由及び安全

1 締約国は、次のことを確保する。

- (a) 障害のある人が、他の者との平等を基礎として、身体的自由及び安全についての権利を享有すること。
- (b) 障害のある人が、他の者との平等を基礎として、自由を不法に又は恣意的に奪われないこと、いかなる自由の剥奪も法律に従い行われること、及びいかなる場合においても自由の剥奪が障害の存在により正当化されないこと。

2 締約国は、障害のある人が、いずれの手段を通じても自由を奪われた場合には、他の者との平等を基礎として国際人権法による保障を受ける権利を有すること、並びにこの条約の趣旨及び原則に従い取り扱われること（合理的配慮を行うことによるものを含む。）を確保する。

条約第15条 拷問又は残虐な、非人道的な若しくは品位を傷つける取扱い若しくは刑罰からの自由

条約第16条 搾取、暴力及び虐待からの自由

1 締約国は、家庭の内外におけるあらゆる形態の搾取、暴力及び虐待（これらのジェンダーを理由とする状況を含む。）から障害のある人を保護するためのすべての適切な立法上、行政上、社会上、教育上その他の措置をとる。

- 2 締約国は、また、搾取、暴力及び虐待の事案を防止し、認識し及び報告する方法に関する情報及び教育を提供すること等を通じて、特に、障害のある人並びにその家族及び介助者に対してジェンダー及び年齢を考慮した適切な形態の援助及び支援を行うことを確保することにより、あらゆる形態の搾取、暴力及び虐待を防止するためのすべての適切な措置をとる。締約国は、保護サービスが年齢、ジェンダー及び障害を考慮したものであることを確保する。
- 3 締約国は、あらゆる形態の搾取、暴力及び虐待の発生を防止するため、障害のある人向けのすべての施設〔機関・設備〕及び計画が、独立した当局により効果的に監視〔モニター〕されることを確保する。
- 4 締約国は、あらゆる形態の搾取、暴力又は虐待の被害者となる障害のある人の身体的、認知的及び心理的な回復、リハビリテーション並びに社会復帰〔社会的再統合〕を促進するためのすべての適切な措置（保護サービスの提供によるものを含む。）をとる。このような回復及び復帰は、障害のある人の健康、福祉、自尊心、尊厳及び自律を促進する環境において行われるものとし、ジェンダー及び年齢に特有の必要〔ニーズ〕を考慮に入れる。
- 5 締約国は、障害のある人に対する搾取、暴力及び虐待の事案が明らかにされ、調査〔捜査〕され、かつ、適切な場合には訴追されることを確保するための効果的な法令及び政策（女性及び子どもに重点を置いた法令及び政策を含む。）を策定する。

☆新障害者基本計画（原案）の第8項（差別の解消及び権利擁護の推進）

ー基本的な考え方ー

全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、平成25年に制定された障害者差別解消法等に基づき、障害を理由とする差別の解消の推進に取り組む、あわせて障害者の虐待の防止等、障害者の権利擁護のための取り組みを進める。

○権利とは何かを一つひとつ確認する

○尊厳、自立（自律）、平等などの意味を深く考え、話し合う

○人権感覚を高める（個人として、組織として。常に利用者（障害のある人々）の立場から物事を見る）

2. 常時介護を要する障害者の支援施設から身体拘束を考える

○安全確保と身体拘束（ex. 車イス上の安全ベルト、ベッドからの転倒防止、ケガ防止の為にタオルガード等）

○生命維持（医療的ケア等）と身体拘束（ex. 経管栄養、胃ろう、呼吸関連機器等の抜管、点滴の抜針防止等）

○利用者と職員のストレスケア

- ・ 絶え間のない欲求…絶え間のない痛み。攻撃的言動…その理由を掘り下げて考える。すべてのことに理由がある。
- ・ 虐待を起こしてしまうのではないかという不安の存在。チーム（組織）で支え、個人を追い込まない。

3. 身体拘束など虐待防止に向けた取り組み

○身体拘束に関して、施設が必ず行うべきこと

(1)身体拘束は明らかな権利侵害であり、行ってはならないという共通認識を持つ。研修、ケーススタディ等で感じながら学ぶ。

(2)やむをえず身体拘束を行う場合の順守事項

- ① 3 要件（切迫性・非代替性・一時性）に照らす
- ② ケア会議等にて検討（本人・家族参加）
- ③ 組織として判断決定（本人・家族の合意が前提）
- ④ 個別支援計画への記載と経過記録

(3)個別支援計画を根拠として（本人、家族の合意、常にモニタリング）、チームで連携し科学的なケアを行う。

(4)メンタルヘルスケア

- ・ メンタルヘルスケアに取り組んでいる事業所の割合…H23：43.6% → H32：100%へ（新障害者基本計画（原案）成果目標より）
- ・ 過剰反応の整理を行い、正しい知識とルールを身に付ける。
- ・ 心と身体を自由に、新しい刺激が入りやすい（動機づけられやすい）ように

○働く環境とモチベーションについて ―私達の実践から―

- 入職時の資格・能力にはあまりこだわらない・努力し高めあう環境づくりを目標とする

→ 資格は取れば良い 能力は高めれば良い

1人ひとりの特長を認め、必要とし、すべての人が「人材」となるチームを目指す

- 本人の動機と、「志を一緒に持てるか」にこだわる

面接時に、なぜ障害福祉の仕事を希望するのかを尋ねる

本人の動機を確認して、苦しい時に戻る場所を共有する。

- ・ 新卒・中途採用・高齢者雇用 → 事業所の理念を理解し、利用者を大切に
するチームの一員となってもらう為には、ス
タッフ一人ひとりを理解し、大切にすること
が、管理者等及びサービス管理責任者の
役割ではないかと考える
- ・ 正規雇用 嘱託 パートタイムなど
就業形態は様々で正規雇用の割合
が高い

- 職員研修・活動

- ・ 外部研修 {
 - ・ 全国 全国身体障害者施設協議会主催 4回 その他 4～5回
 - ・ 九州 九州障害者支援施設協議会主催 3回 その他 2～3回
 - ・ 県内 熊本県身体障害児・者施設協議会主催 2回 県その他 8～9回
- ・ 内部研修 {
 - ・ 新任研修
 - ・ 新任～中堅視察研修
 - ・ リーダー研修
 - ・ 職員全体会議
(復命研修・3分間スピーチ・各部報告・講義)
 - ・ 研修の受け入れ
(学生・施設関係者・地域福祉関係者など)
- ・ 福祉サービスの第三者評価
- ・ 地域活動研修
(消防団・交通指導隊・女性防火防災クラブ・八千代座での観劇等(感想文)・地域の
祭りへの参画)
- ・ 海外ボランティア研修
 - ・ 空飛ぶ車イス事業 (ベトナムの貧困地区へ、リサイクルした車イスを届けたり、エイズ
の子ども達等を支援する活動)
- ・ スタッフの活動
(野球チーム・綱引きチーム・屋内消火栓操法チーム・山鹿灯籠伝承クラブ・ビーチバレ
ー・ヨガ)

- スタッフのチームワーク

- ・ 喜びと悲しみの共有から
- ・ みんなで成長する、進化する、成熟する (事業所、スタッフ共に)
- ・ いつも助け合う (ひとりじゃない)

- 福祉サービススタッフの社会的評価と保障を求め続ける

①個々のニーズ

利用者は、最も制限の少ない方法で、自分のニーズや目標に添って自分自身も計画に参加し、サービスを受ける。

「利用者がしたいこと、利用者の目標のために計画する。」

※ 利用者がサービスを利用するとき、スタッフは、利用者がやりたいことをするのを助け、目標達成を助ける。サービスはそれを最も必要とする人々のためにそこにある。

②自己決定と選択

利用者は、自分が受けるサービスに関連する毎日の日課や、活動についての決定に、できる限り完全に参加する機会を持つ。

「利用者は自分の意見を言い、相談する人を選ぶ。自分で選択する。」

※ スタッフは、利用者が必要としているものや、サービスの運営方法について利用者の話を聞き、必ず運営に反映していく。

③個性と可能性の尊重

利用者は、個性を磨き可能性を拓ける機会と、社会で評価される役割を果たすことを可能にする活動に参加する機会を持つ。

「自分の人生をできる限り楽しく生きる。」

※ 各方面からの情報を得て、利用者が興味領域に向かうことをサポートする。

④参加と統合

利用者は、地域社会での生活に参加し、関与するように支援を受け、奨励される。参加への道すじ（アクセス）の確保ができるよう、利用者・スタッフ共に努力する。

「地域社会に参加する。」

※ 利用者が地域社会に溶け込み、他の人々と同じようなことをするのを助けるサービスを行う。

⑤プライバシー、尊厳、秘密保持

生活の全ての面において、プライバシー、尊厳、秘密保持に対する利用者の権利が認識され、尊重される。

「プライバシーと秘密は守られる。」

※ 利用者についての個人的な情報を公表せず、利用者に敬意をもって接する。

⑥人権尊重、危機介入

利用者はそれぞれ、サービスや、その組織に関して持つ不満や希望を自由に呈し、解決する。サービスの場面で、スタッフやサービスを利用する他の人々が、利用者の感情や身体を傷つけることを防止する。

「危機状況には速やかに介入し、回避する。」

※ スタッフと館長は利用者の話を聞き、サービスやスタッフに関して利用者が抱えている問題を解決する。

⑦家族関係・人間関係

利用者は、家族関係やこれまで作ってきた人間関係を維持し、今後も拓げていけるようなサービスを受ける。

「利用者の家族や友人は最も大切である。」

※ サービスは、利用者が自分の家族や友人と付き合い続けるのを助け、新しい人間関係も生まれるよう配慮する。

⑧サービス管理

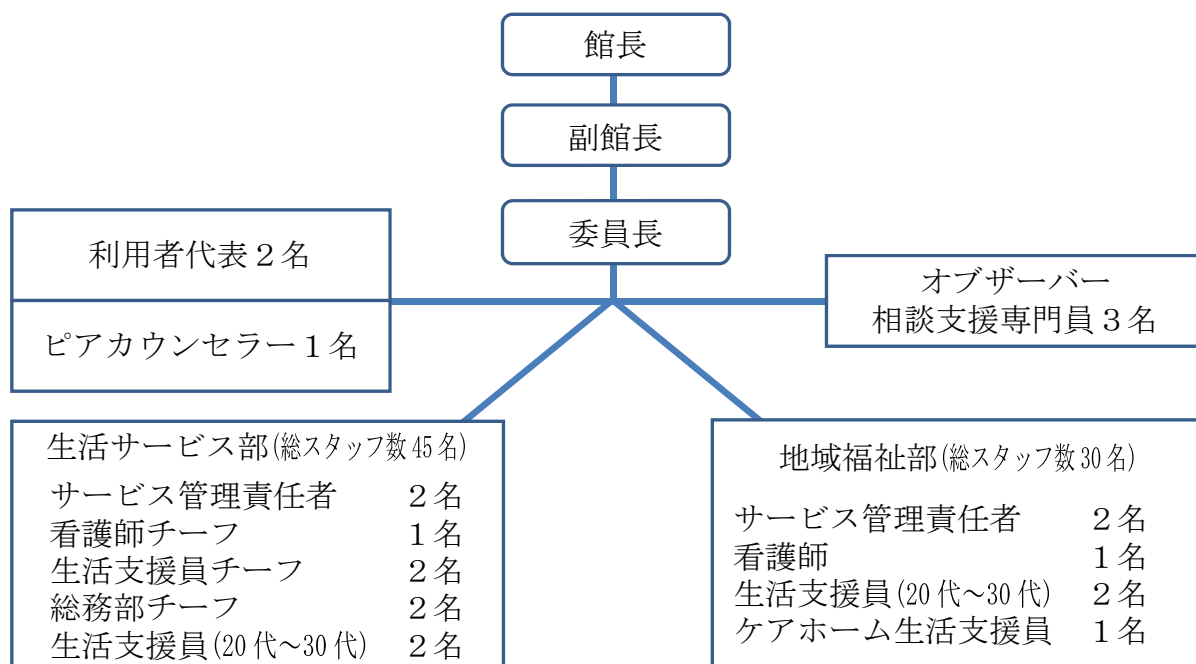
愛隣館の各組織は、利用者のために最大限の成果をあげる安全で健全な管理業務を遂行する。

「サービスは安全に柔軟に運営される。」

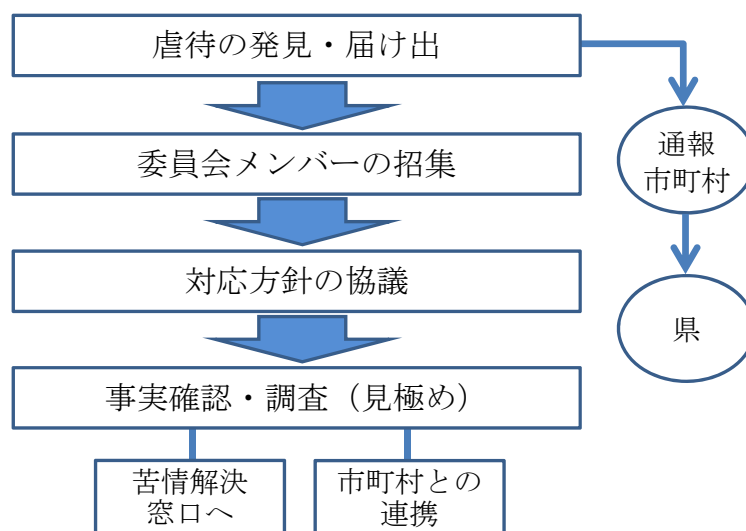
※ サービスがうまく運営され、できる限り多くのニーズに対応できるよう研究を重ねる。さらに、自然災害等の危機管理に向け、平素から地域のネットワーク作り及び支援団体との連携を密にする。

- ・ヒューマンライツ委員会の活動より

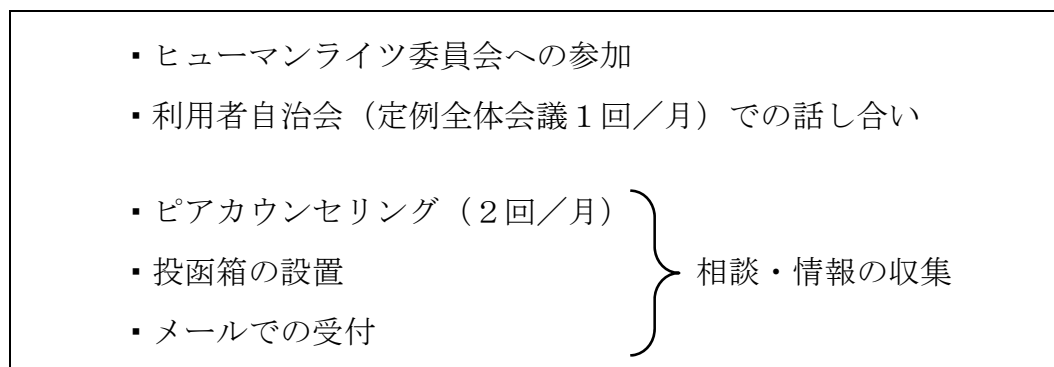
ヒューマンライツ委員会組織図



ヒューマンライツ委員会対応方法



利用者参加型の虐待防止の取り組み



愛隣館ヒューマンライツ委員会の虐待防止に向けての取り組み

○委員会メンバー活動（虐待防止の周知や啓発活動、研修会や勉強会の開催）

各部（生活サービス部・地域福祉部 ごと）：毎月、委員会開催

全体（生活サービス部・地域福祉部 合同）：2ヶ月に1回委員会開催

○サービス提供職員への研修会・勉強会の開催

1. 「障害者虐待防止法」についての勉強会（各部）

：障害者虐待防止法の手引き使用

2. 第1回サービス提供職員の虐待に対する意識向上のための勉強会

：平成24年度九州障害者支援施設協議会サービス提供職員研修会

「講義Ⅱ事前アンケート(虐待が疑われる例)に対する質疑応答」資料を使用し、事例を基に勉強会を行った。

3. 第2回サービス提供職員の虐待に対する意識向上のための勉強会

：障害者虐待防止の手引き（チェックリスト）施設・地域における障害者虐待防止チェックリストを配布し、結果を基に個人の意識向上の勉強会を行った。

4. 第3回サービス提供職員の虐待に対する意識向上のための勉強会

：職員に対して、無記名での虐待又は疑わしい行為に関するアンケート調査を実施し、結果を基に事例検討会を開催。

5. 毎月、それぞれの部所でテーマを決めて、一月間の評価を行う。

○サービス利用者へ聞き取り調査

福祉サービス利用者調査を実施

：市障害者相談員へ調査を依頼し「平成24年度福祉サービス利用調査表」を基に、聞き取り調査を実施。

○活動報告

・職員全体会議（1回／月）

・入居者定例全体会議（1回／月）

・家族報告会（1回／年）

◎虐待防止のために

普段の取り組み

☆ 利用者への権利侵害を許さない組織風土を持つ
(チェックリスト自己評価や他者評価及び研修等で高い意識を保つ)

虐待（虐待・暴言・暴行）が疑われる場合の 取り組み（※48 時間以内を目途に）

明らかな虐待の 発見

1. 気づいた者が即座に上司へ報告する（義務）

サブチーフ → チーフ → サービス管理責任者 → 副館長 → 館長

市町村
通報

2. 対応会議

- 家族への報告
- 方針の決定

3. 報告事例（権利侵害の事実）の調査

（利用者、スタッフへの聴き取り）

4. 対応と処分の決定（就業規則 49 条②に基づく）

就業規則 第 49 条（懲戒解雇）②他人に対し暴行脅迫を加え又はその業務を妨害した者

4. おわりに

○それでも、虐待は起こり得るという意識を持ち続けること

○「表現する自由。田中さん 22 年目のブレイクー自己実現」

車いす目線…写真に情熱

全身に運動障害

田中さん (山鹿市)

変形性筋ジストニアで全身に運動障害がある山鹿市の田中鉄也さん(38)が8月15日から21日まで、同市山鹿の古民家ギャラリー「百花堂」で初の写真展「緑」を開く。写真を始めて5年目。意思通りに動かない体を駆使して、車いす目線の作品を撮り続けている。

来月15日から初の個展

「不思議な魅力」100点

初の個展を開く田中鉄也さん(山鹿市)

車いすに乗り、右手に専用グリップを付けたコンパクトカメラを握り、テープで固定しシャッターチャンスを狙う。筋肉が異常な動きを繰り返すため、ファインダーをのぞいたり、アングルを固定したりするのは難しい。作品は「自然に任せて」撮影するといい、地面スレスレの高さで風景を切り取ったり、青空を見上げたり、自分の足が映り込んでいたり、田中さんならではの世界が広がる。昨年、同市であった障害者芸術展で好評で、ギャラリーのオーナーから「これまで見たことがない不思議な魅力がある写真」と今回の個展を持ち掛けられた。個展では撮りためた3千枚以上の写真の中から、約100点を選び展示予定。午前11～17時。百花堂 ☎080(6426)4519。(岩下勉)



田中鉄也さんの作品「さんぼもち」



田中鉄也さんの作品「明日は晴れ」

熊本日日新聞 7月31日